

パラグラフ・ライティングは「つながり」から「まとまり」へ

山岡大基

本稿は、パラグラフ・ライティング指導における「つながり」(cohesion・結束性)と「まとまり」(coherence・一貫性)の指導順序に関して考察する。「つながり」と「まとまり」は、旧来よりパラグラフ・ライティングにおいては重要な要素と指摘されてきたが、概念的な理解に留まることが多く、実践的には必ずしも、それらの指導方法について体系化がなされてきたわけではない。筆者の指導経験上、「まとまり」を焦点化する指導だけでは、「まとまり」を作る力を生徒に身に付けさせることが困難であった。むしろ、「つながり」を焦点化して指導することにより、かえって「まとまり」の面でも好影響が見られた。両者がパラグラフ・ライティングにおいて同等に重要な要素であることは言を俟たず、また、常識的に考えて、両者に同時並行で配慮することが現実的ではある。しかし、本稿では、あくまで1つの可能性として、「まとまり」を指導する際、あえて「つながり」から指導を始めることが効果的ではないかという提案を行う。

1. 「つながり」と「まとまり」

英語ライティング、特にパラグラフ・ライティングにおいて、英語として自然な、つまり、書くことを通じてなるべく円滑にコミュニケーションができるような文章の要件として「つながり」と「まとまり」の2点が近年特に強調されるようになってきている(日向2013¹⁾、2015²⁾、石井2015³⁾)。「つながり」と「まとまり」について石井(2015)⁴⁾は次のように説明している。

つながり (cohesion)

各センテンスが前後のセンテンスと意味上および形式上かかわりがあり、直線的に言葉が流れている。

まとまり (coherence)

すべてのセンテンスが明確に1つの話題について述べていて、全体として1つのメッセージを成している。

(p.12)

当てられた訳語を見ればわかるように、「つながり」とは cohesion、つまり従来は「結束性」と訳されることの多かった概念であり、一方「まとまり」とは coherence で「一貫性」と訳されることの多かった概念である。cohesion も coherence も新奇な概

念ではなく、パラグラフ・ライティングを論ずる文脈においては一般的に用いられてきたものである。たとえば沖原(1985)⁵⁾は次のように述べている。

和文英訳という作業が主として英語の語法や表現についての文字による練習であるのに対して、パラグラフ・ライティングはどちらかと言うと作文の内容構成面を受け持つ練習形態と言ってよいであろう。具体的には、書きことばの様ざまな規則、cohesion (文と文の文法上のつながり)、パラグラフ内の構造、coherence (文と文の意味上のまとまり)、パラグラフ内の構造、パラグラフ相互の関係、などについての理解を得させ、学習者自身の作文においてそれらの知識が活用できるようにすることが目標となる。(p.25)

2. 「つながり」指導の貧困

では、なぜ今あらためて「つながり」と「まとまり」が強調されるのであろうか。それは、とりもなおさず、英語ライティング指導において、それらが十分に理解され実践されていない現状があるからに他ならない。特に、「つながり」については一面的な扱いしかなされないことが多い。

たとえば、パラグラフ・ライティングが取り上げられることの多い「英語表現Ⅱ」の教科書においては、「topic sentence と supporting sentences」,

「Introduction-Body-Conclusion」といったパラグラフ構成や、「時間的順序」「対照・対比」「列挙」といったパラグラフ展開は、例外なく取り上げられている。これらは、パラグラフの「まとまり」に関わる要素である。

いっぽう、「つながり」については、for example や in conclusion といったディスコース・マーカの使用を促すことにほぼ終始していると言ってよい。当然のことながら、ディスコース・マーカの使用自体に意義があることは否定すべくもない。しかし、cohesionに関する古典である Halliday and Hasan (1976)⁶⁾が、cohesionを作る道具立てとして大別した、reference (照応・指示)、substitution (代用)、ellipsis (省略)、conjunction (接続)、lexical cohesion (語彙的結束)の5つのうち、ディスコース・マーカの使用は conjunction の一種に過ぎないことを考えると、現状での「つながり」の扱いは、きわめて一面的で偏ったものと言わざるを得ない。

このことは、「英語表現Ⅱ」教科書の構成にも表れている。多くの教科書が前半部で、特に文法事項に焦点を当て、センテンス単位でのライティングを学習し、後半部でパラグラフの構成や種類に焦点を当て、パラグラフ単位でのライティングを学習する構成を採用している。そのような構成においては、生徒の学習は「正確なセンテンスを書くこと」から、「まとまりのあるパラグラフを書くこと」へと一足飛びに進み、その間にあるはずの「センテンスとセンテンスをつなげて書くこと」の学習がないがしろにされがちである。

このことについて大井 (2008)⁷⁾は「文章に結束性を生む練習は2～3文単位から十分につむことができる」(p.56)と指摘しており、センテンス・ライティングからパラグラフ・ライティングへの橋渡し段階としての「つながり」指導の意義を説いている。もちろん、「橋渡し」とは言っても、実際の指導場面において、厳密に「つながり」から「まとまり」へと順序づけて指導するという考え方は現実的でない。常に両者への目配りを忘れず、必要に応じて一方を焦点化するというのが実際の態度であろう。しかし、そうであっても、「つながり」について理解しておくことが、「まとまり」の学習において活かされる、という関係性は仮定してもよいだろう。

3. 生徒の作文の特徴：「まとまり」の欠如

「つながり」について指導するといっても、上述の Halliday and Hasan による分類を網羅的に扱うのは時間的制約から難しい場合が多いであろう。次節以降で報告する指導実践においても、センテンス単位での正確さの向上や語彙の拡充など、学習上の課題は他にもある中で、「つながり」だけを取り立てて焦点化する余裕はなかった。また、生徒のライティング力のうち不足しているものを補うという観点からも、網羅的な指導よりも、指導事項に優先順位を付け、重要なものから重点的に指導していく方が理に適っている。

では、何を優先すべきであろうか。筆者が2015年度高校3年生「英語表現Ⅱ」で行ったパラグラフ・ライティング指導においては、生徒が4月時点で書いた作文から、重点的に指導すべき事項を取り出すことにした。

まず、どの作文にも共通して見られる問題点は、トピック・センテンスが、続くサポーティング・センテンスによって十分にサポートされていないことである。トピック・センテンスそのものの作り方にも問題がないわけではないが、それよりも、トピック・センテンスで書いたことを踏まえ、そこから離れないように第2文以降を書くという意識が低いことの方が大きな問題であるように思われる。

また、特に、トピック・センテンスで述べた内容を十分に説明していない段階、多くは第2文や第3文で、For example を使って具体例を提示しようとする傾向も強い。しかし、説明が不十分のまま例示に移っているため、何を例証するための具体例であるかがわかりにくい場合が多く、また、先行部分と整合性がない具体例を提示してしまう場合も少なくない。

以下、生徒が実際に書いた作文を例示し、上記の問題点の具体例を示す。作文のテーマは「草食(系)男子」を、日本文化になじみのない英語話者に理解してもらえるように説明しなさいである。なお、英文の誤りはすべて原文ママである。

(1)

This word means a man who seldom has romantic feeling. “Carnivorous” sometimes means that someone who is positive to fall in love in Japanese. And “Sosyoku” originally means “herbivorous” in Japanese. So this word, it is call “herbivorous man”, is contrast to “carnivorous” and means such a meaning mentioned above.

第1文は、日本語での使用実態との整合性はともかく、「草食(系)男子」の簡潔な定義として成立し、トピック・センテンスとして機能すると言って良い。すると、第2文では、*seldom has romantic feeling*の部分をより詳しく掘り下げて説明することが期待される。しかし、実際の第2文では、*Carnivorous* (肉食) という、「草食」の対義語が主語に据えられ、唐突である。

「草食(系)」が比喩表現であることから、比喩を分かりやすく説明するために対義語である「肉食」を持ち出し、その対照関係から「草食(系)男子」の説明をしようという意図ではあろう。しかし、「肉食(系)」自体が「草食(系)」と同等の比喩であるため、結局「肉食(系)」についても説明が必要になる。つまり、説明が迂遠になるだけで「草食(系)」そのものの説明としては効果的ではない。

書き手としては、自分の書いた第1文を起点に、そこではまだ漠然としている概念を、より明瞭に解き明かしていくべきなのであるが、そういった意識が、この文章を書いた生徒には希薄であったと推測される。

(2)

In Japan, amount of Soshokukeidansi is growing. It means a boy who takes negative attitude toward many kinds of things. For example, he can't talk to a girl. Because he is shy or indifferent to a girl. Most of them are shy.

この文章の第1文は、「草食(系)男子」の定義という本題に入る前に、「草食(系)男子」というものの存在に言及し、読み手を文章へと導き入れるイントロダクションの役割を担うものである。「草食(系)男子」という topic は提示しているものの、その定義はここでは示されていない。topic に対応する controlling idea すなわち、この文章では定義を述べている第2文が、実質的なトピック・センテンスになっていると言ってよい。

その第2文は、*negative attitude toward many kinds of things*を「草食(系)男子」の定義として挙げている。このように述べる以上、*many kinds of things*とはどのような物事を指すのか、また、それらに対する *negative attitude*とはどういうものなのかが説明されなければならない。

そして、第3文では *For example* で具体例を導いている。ここでは、*negative attitude toward many kinds of things* を例示によって説明しようという意図であろうから、ここで具体例を述べること

自体は悪い書き方ではないであろう。しかし、挙げられているのが「女性に対して積極的でない」という例だけであり、*shy* という説明で終わっており、不十分である。

(3)

A man who has a passive mind of love. Their belief is "Not making a move, keep waiting." And often they have a feminine side, for example, making a box lunch everyday.

Their existence often causes an argument of the yeas and nays. One side says "It's the freedom of an individual," and another says "It will be concerned with the continuation of human race."

第1文が定義を述べており、トピック・センテンスとして意図された文であろう。そして第2文では、*Not making a move, keep waiting* (「自ら行動を起こさず、待ち続ける」の意であろう) とあり、第1文の *a passive mind of love* を、不十分ながら、より詳しく述べようとしている。しかし、第3文で唐突に *a feminine side* という特徴が取り上げられ、内容が転換している。第1文の *passive mind of love* とはおそらく無関係な内容であり、パラグラフとしてのまとまりを欠いている。

第2パラグラフでは「草食(系)男子」の存在に対する賛否両論が述べられているが、肝腎の「草食(系)男子」そのものの説明が第1パラグラフで十分になされていないため、文章が断片化してしまっている。

(4)

"Sousyoku-danshi" is a man who is like a zebra or a rabbit which eat vegetable. The word is made by Japanese young people. For example, they use it "He always get a cold. So he is Sosyoku danshi." "Because of he is sosyoku danshi, he don't say his opinion in the conversation. According to this text, the word means shy and weak. 15% people are shy by genetic and some people can take over it. So Sousyoku danshi can exchange "Nikushoku danshi" They are very strong and always say there opinion. Japanese man are aparted sousyokukei or nikusyokukei.

第1文は、「草食」の比喩を説明しているが、「草食(系)男子」の定義とは言えない。第2文も、「日本の若者の造語」という周遍的な情報を与えるだけである。第3文で「草食(系)男子」の用例が

示され、それを受けて第4文でようやく the word means shy and weak という定義が述べられる。ここに至って、第1文の比喩が実質的に説明されることになるので、この第4文がこのパラグラフのトピック・センテンスの役割を果たしていると考えられる。

しかし、第5文～第7文は「草食系を克服し、肉食系に変わる」という話になっており、「草食（系）男子」の説明という第4文までとは趣旨が変わっている。また、最終の第8文は、日本人男性は草食系と肉食系に二分されると述べているが、そのことが先行文脈とどのような関係にあるのかは不明である。

書き手の思考としては、おそらく、第4文と第5文の間で話に切れ目があり、実際は第5文～第8文を別のパラグラフとして独立させる方が、書き手の意図をより適切に表すことができるのであろう。また、そうした場合、2つのパラグラフはいずれもトピック・センテンスが末尾に位置する型になっていると考えると理解しやすい。

要するに、この文章を書いた生徒は、英語におけるパラグラフの概念や、「抽象から具体へ」「一般から個別へ」といった論理的なパラグラフの典型的構成について理解しておらず、自らの帰納的な思考の流れをそのまま文章構成に反映させているのではないかと推測される。

さて、以上のような生徒の作文の分析から明らかになった課題とは、彼（女）らが「まとめり」のある文章（パラグラフ）を書くことができていない、ということであった。

4. 「まとめり」指導とその限界

生徒の作文に「まとめり」が不足しているとの現状分析から筆者がまず焦点を当てたのは、パラグラフの構成であった。「抽象（一般）から具体（個別）へ」という典型を忠実に守ることに加え、トピック・センテンスを十分に深めないまま安易に For example での例示に頼ることを特に問題視した。

そこで、イントロダクションとトピック・センテンスの違いを意識させた上で、「トピック・センテンスとその次の1文」の2文を密接に関連付けて書く練習を課した。すなわち、センテンスからパラグラフへと一足飛びに移行するのではなく、その橋渡し段階として、特にパラグラフの冒頭に限定して「最初の2文」を適切に書く練習が必要だと判断したのである。

その結果、たしかに生徒の意識は向上し、作文の

質にも改善が見られる例も出てきた。たとえば、次のような例である。テーマは「携帯電話を初めて持つのに適切な年齢」である。

(5)

They should use their first mobile phone when they reach 13 years old because they enter their junior high school. Entering a junior high school is one of a turning point of life. They begin to think regulating their behavior, because junior high school teachers don't teach them attentively how to do all things in lives different from elementary school. The mobile phones helps their growth, especially as to communication.

(6)

People who is 12 or 13 years old should get their first mobile phone. Because they enter their junior high school, and many of them would reach adolescence. Adolescent people dislike their alone time. So they always need to communicate with their friends. Therefore they need their mobile phone when they are alone.

(7)

People should get their first mobile phones at the age of 20 and over, because they become members of society at these ages. People who are younger than 20 year old and not members of society can't contract to have their own mobile phones. Using a mobile phone wrongly is sometimes risky. You may hurt other's feelings or may do illegal things unconsciously. In such a case, people have to take responsibilities, but people who can't contract to have their own mobile phones can't take responsibilities. Usually, their parents do it. Therefore, people who are not members of society and can't take responsibilities shouldn't have mobile phones. And 20 years and over is the best.

しかし、それでも、トピック・センテンスを適切に深める (develop) ということが、概念的には理解できても、実際に文章を書くときにどうすればよいか分からないという生徒も少なくなかった。たとえば、典型的には次のような作文が見られた。

(8)

I think people should get their first mobile phone from 6-7 years old. These days, the number of parents who works is increasing or the number of crimes is

increasing. So, if it happens troubles, they have better call their parents. And their parents can use GPS. So, I think you should have your children got a mobile phone early.

第1文は問いに答えるトピック・センテンスとなっているが、第2文は、背景的な一般論を述べている。これは、書き手が、トピック・センテンスを冒頭に持ってくる英語的なパラグラフ構成について知ってはいるものの、日本語のある種の作文でしばしば良いとされる起承転結の文章構成から脱却できていないことによると思われる。

(9)

Almost all people should have their first mobile phone for the first time after they reach 19, because they start to earn money at 19. Of course, communication with one's friend is important through his life, so he should put emphasis rather on its quality than on its quantity. But, people who have never worked cannot truly understand how much money the communication costs you. Any communication is expensive, and people understand it when you become to need their own working for a kind of communication, but people who use their phone with other's money can use their phone much more easily and may not realize how expensive it is for the last.

この文章の書き手は、一般的な英語学力は高い生徒で、そのことは文法・語法の運用が比較的正確であることから見て取れる。しかし、パラグラフ冒頭の展開の仕方には「まとまり」がない。

第1文は主張と根拠を簡潔にまとめて述べており、トピック・センテンスとして機能している。それに続く第2文は Of course で始められ、But で始まる第3文と相関的に働く、いわゆる譲歩の型を構成している。しかし、communication with one's friend is important through his life あるいは、communication of the quality と quantity の話は、第1文とは無関係であるか、あるいは少なくとも自明な関係があるようには思われない。また、of course で示される譲歩が、いったいどのような想定反論に対する譲歩であるのかも不明である。

推測するに、携帯電話はコミュニケーションの道具であるから、19歳以前の人にも必要だ、という反論を想定し、それを前提として論を展開しているのであろう。しかし、それを読み手が推測しなければならない時点で論理的な文章としては失格である。

5. 「まとまり」を導く「つながり」

さて、「まとまり」について指導したものの、なお残された上のような課題を解決するにはどのような指導が必要であろうか。筆者は、前節で示したような「まとまり」の改善が見られた作文とそうでない作文を比較し、改善が見られた作文はどのような点で変容したから「まとまり」が良くなったのかを検討した。

その結果、文と文のつなぎ方に特徴があることが分かった。たとえば、前節の例では次のようなつなぎ方がなされている。

(5) They should use their first mobile phone when they reach 13 years old because they **enter their junior high school**. **Entering a junior high school** is one of a turning point of life.

(6) Because they enter their junior high school, and many of them would reach **adolescence**. **Adolescent** people dislike their alone time.

(7) People who are younger than 20 year old and not members of society can't contract to have their own **mobile phones**. **Using a mobile phone** wrongly is sometimes risky.

いずれも、前の文の末尾の語句を次の文の主語の位置に用いて話を展開することで、前の文で述べた内容を深めている。

これは、日向 (2013⁸), 2015⁹) が「Z字型」と呼ぶ文章展開のパターンに相当する。「Z字型」とは、1文を「トピッカーコメント」に分割したとき、前の文のコメントを次の文のトピックが受ける文章展開の型である。たとえば、日向 (2015)¹⁰ は次のような例を示している。(「太字囲み」は筆者による。)

Most American alligators live in **freshwater** swamps and lakes. **Freshwater** habitat is their normal environment because they have a low tolerance for **salt**. **Salt** water is not good for them because, unlike crocodiles, they don't have a gland that filters out salt from their blood.

このような文のつなぎ方を用いることで、トピック・センテンスで述べた内容を次々と深めていくことができる。

日向は、一方で、「逆コの字型」のパターンも示

している。これは次のように、同じトピックを共有しながら文が繋がっていくパターンである。

Bitter melon is actually not a melon but a cucumber-like vegetable. **It** is a great source of vitamin C. **It** is also known for its ability to lower blood sugar levels.

文章は、このような工夫で文と文の「つながり」を保障することにより、読み手が理解しやすいものとなる。

さて、「まとめ」の指導をした後に残された問題の解決に議論を戻す。考えてみると、「トピック・センテンスとサポーター・センテンス」や、「イントロダクション／ボディ／コンクルージョン」といった文章作法については、生徒は一通りの知識としては持っているわけである。したがって、文章の意味内容からのアプローチで作文が改善されなかった生徒は、そういった知識を実際の作文に活用するための具体的方策を欠いていたと言える。具体的方策とは、すなわち、文章の意味内容ではなく言語的側面をどのように操作すべきか、ということである。

そこで、筆者は、この「Z字型」および「逆コの字型」の展開について指導することにした。特に、「Z字型」を使用できる生徒が限られていたことから、これを重点的に指導した。なお、実際の指導においては、説明の便宜上、それぞれ「階段型」「フォーク型」という名称を用いたが、意図する内容は同じである。

指導の結果、生徒の作文に改善が見られた。以下に、4月時点と12月時点と比較して、改善が顕著であったと思われる生徒の作文を例示する。4月の作文のテーマは先述の「草食（系）男子」の説明であり、12月のテーマは「ふるさとの良さは離れてみて初めてわかる」という趣旨のトピック・センテンスに続けて1パラグラフを書くというものである。

なお、改善が見られるといっても、12月時点の作文にも不十分な点は残されている。しかし、本稿では特に改善された点に着目し、瑕疵にはあえて言及しない。

(10a) 生徒 A 4月

Soshokukeidansi, what is called, is a boy who often wears glaceas and the simple T-shirts and so on, and he is negative about something to do, and he don't know how to make his girl frend excited. I don't think him good who don't know how to make her excited but who don't try to make her excited. If I were a boy, I would like to

make her happier. Furthermore, he don't express his feeling of loving her, and so she becomes unhappy.

第1文内部では「逆コの字型」の展開を作ることができているが、第2文では主語がIに変わり、話題も「草食（系）男子」の説明から筆者の意見へと変化している。また、最終文はfurthermoreで導かれてはいるが、何に対して何を付加する文なのか不明である。

(10b) 生徒 A 12月

It is not until you leave your hometown that you realize the good point of **your hometown**. **A hometown** is the area whose scenery you always see, so you may lose interest in the area. However, if you leave it for the area which is far from there, you will find the things you always see and hear are not ordinary and so wonderful.

第1文と第2文が「Z字型」でつながれている。そのことにより、hometownとは何か、といった「そもそも論」（大前提）が自然と導かれている。

(11a) 生徒 B 4月

Negative boys in Japan are increasing now. They are called “soshokukei-danshi” by Japanese people. Let's explain what is “soshokukei-danshi”. First, most of them are lean and don't much eat. Japanese women don't like them. In addition, “soshokukei-danshi” doesn't talk much. When a woman dated the boy, he would be boring her. Most importantly, a large number of them are always negative. Not only Japanese women but also people in your country have trouble talking them. I think they come to be more aggressive. And, if they changed characters, they would have a happy life.

この文章では、Let's explain, First, In addition, Most importantlyといったディスコース・マーカーが積極的に使用されており、その意味で、見かけ上は論理的に展開されているように見える。しかし、内容を見ると、「草食（系）男子」の定義だけでなく、女性が彼らをどう評価するかといった話題や、そこから、「草食（系）男子」は望ましくなく、自己変革が必要であるといった筆者の主観が述べられており、「まとめ」に欠ける。

(11b) 生徒 B 12月

It is not until we leave our hometown we realize **the good points** of it. **The good points**, for instance, make

us feel **kindness** of the people who live in the town. It is not easy for us to realize **the kindness**. And, when we move into another town, we feel nostalgic for our hometown. Furthermore, the feeling makes us want to go back to the town. I think this is the best point of our hometown.

ここでも、第1文と第2文が、the good points という語句で「Z字型」につながれており、第2文と第3文も、構文は拙いが、the kindness という語句によってつなぐ工夫がなされている。

(12a) 生徒 C 4月

A boy who has little interest in girls or who is shy with girls. He doesn't talk with girls so much. Even if he had a girlfriend, he couldn't talk with her or walk hand in hand. These days, there are more such boys than before, but many girls want boys to be more aggressive about love.

ここでは、第1文～第3文で「逆コの字型」のパターンができており、その意味において、「つながり」の面では、決して悪くない。しかし、第4文は「女子の願望」を述べており、パラグラフとしての「まとまり」を損ねている。

(12b) 生徒 C 12月

It is not until **you** leave your hometown that you will realize how nice it is. When **you** live in there, you take it granted for its advantages, such as, how rich its nature is or how kind people living there are. **You** might not be excited in the familiar mountains or rivers and feel like going to the city, which has many shops or amusement parks. **You** might also be annoyed with people's kindness and want to live by yourself. However, once **you** started to live by yourself in the city, **you** will miss its nature and people. **You** will find that people are too busy and have less relaxing time in the city, unlike in your hometown. Therefore, **you** should appreciate your country's advantages, and it makes your life enjoyable.

この文章でも、この書き手は「逆コの字型」のパターンを好んで用いている。しかし、(12a)のようにサポーターティング・センテンスがトピック・センテンスから逸脱することがなく、一貫して、「住んでいるときには当たり前と思っているが、離れてみるとその良さが分かる」という趣旨でパラグラフを展開することができる。

(13a) 生徒 D 4月

The word generally means that shy men. They isn't good at speaking to somebody who he first meets and telling his friend what he truly felt. Generally speaking, they have been increasing in Japan for the time being. They form their personalities in their childhood. And then, they could chose two ways. First, they could be a sociable nature and vital people by playing the sports or playing the music in their younger days. And, the other hand, they grow a quiet and gentle person by shutting themselves up. Unfortunately, most people regard them as cool and boring people. In fact, they are comfortable and fascinating people.

この文章は、「逆コの字」型を多用しているが、実際はトピックが一貫しておらず、「草食(系)男子の定義」「草食(系)男子が増えていること」「草食(系)男子が生まれる背景」「草食(系)男子の生きる道」と、次々と移行してしまっている。

(13b) 生徒 D 12月

It is not until you leave **hometown** that you realize its importance. **Hometown** is comfortable place for you because your local dialect and unique **manner** are accepted by everyone. When you lived in hometown, your **manner** is ordinary for others, so you don't feel your own manner is extraordinary for people who lives in rural area. However, if you live in major city, you may feel difference your manner and other's. And if the difference was remarkable, you would be distressed.

この文章では、第1文と第2文が「Z字型」でつながれており、その結果、(10b)と同様に、第2文で「そもそも論」を述べることができている。また、第3文以降で「逆コの字型」の展開も残されているが、トピック・センテンスに対するサポーターティング・センテンスとして機能しており、「まとまり」の面で改善が見られる。

さて、このような生徒の作文の変容を見ると、文章の「つながり」を改善することが「まとまり」の改善にもつながる、とすることができるのではないだろうか。すなわち、最初からパラグラフ全体の「まとまり」を意識するというよりも、「これから書こうとしている1文を、今書いた1文とどのように関連付けるか」という局所的な配慮を積み重ねることが、自然とトピック・センテンスから逸脱しない、内容の一貫した文章を書くことにつながる、ということではないだろうか。

このことは、中学3年生においても観察された。ディベートを扱う中で、発言内容を原稿として書かせていたが、その中で、どうしても主張と根拠がつかず、断片的な発話になってしまうことが多かった。そこで、「フォーク型」「階段型」の用語によって「つながり」を指導したところ、改善が見られた。たとえば、次のような文章である。

(14)

I think that studying is not most important for junior high school student. There are two reasons for this. First, there are things that can be experienced **only when we are young**. **At junior high school**, we can make friends, and perhaps we can make best friends. If we can make them, our life will be happier than without them. (後略)

当然のことながら、「つながり」だけを教えれば自然と「まとまり」もできるようになる、ということではない。「つながり」と「まとまり」の両面を指導していく過程で、しかし、言語的な操作対象の比較的明確な「つながり」を焦点化することで、「まとまり」の理解を深めることが容易になるのではないか、というのが本稿の趣旨である。

6. まとめ：読むこととの連動

本稿で論じてきたような「つながり」と「まとまり」については、主に高校段階でのライティング指導において初めて焦点化されることが多いであろう。しかしながら、良い英文を書くためには、良い英文にたくさん触れることによる「イメージ・トレーニング」も必要である。「イメージ・トレーニング」とは、この場合、リーディングである。すなわち、リーディング技能の指導をする際、文章の意味内容を読み取ることに終始せず、文章の形式面、特にディスコース・レベルでの形式に着目して読む経験を積ませることにより、生徒の「まとまり」「つながり」の意識を高めることができると考えられる。

具体的には、たとえば、中学3年生の教科書に次のような部分がある。

Animals and plants have their own natural rhythms. These come from their **body clocks**. **Body clocks** tell them when to get up, when to eat, and when to sleep. (One World 3 Reading 1 教育出版)

Don't worry about **making mistakes**. **Making mistakes** helps you make progress.

(One World 3 Further Reading 1 教育出版)

Now I want each of you to be a person who can respect others without **prejudice**. **Prejudice** is caused by premature judgment.

(One World 3 Further Reading 1 教育出版)

いずれも「Z字型」の展開である。このような部分を安易に読み流すことなく、書き手の工夫に対して注意を喚起するような（「ことばを読む」）指導を継続することで、生徒自身も英文の書き手として「つながり」と「まとまり」を意識することができるようになるであろう。

「技能の統合」と言うとき、文章の内容を接点にした統合を意味する場合が多いが、言語形式面を接点にして技能を統合することも重要なことであると筆者は考える。

[参考文献]

- 1) 日向清人, 『即戦力がつく英文ライティング』, DHC, 2013年.
- 2) 日向清人, 「「つながり」「まとまり」を重視したライティング」, 『英語教育』, 第64巻第10号 (2015年12月号, 大修館書店, 2015年, 13-15).
- 3) 石井洋佑, 『論理を学び表現力を養う英語スピーキングルールブック』, テイエス企画, 2015年.
- 4) 上掲書3)
- 5) 沖原勝昭, 「ライティングの原理」, 垣田直巳 (監修) 沖原勝昭 (編集), 『英語のライティング』, 大修館書店, 1985年, 1-42.
- 6) M.A.K. Halliday and R. Hasan, *Cohesion in English*, Longman, 1976.
- 7) 大井恭子, 「パラグラフ・ライティングとは何か」, 大井恭子 (編著) 田畑光義・松井孝志 (著), 『パラグラフ・ライティング指導入門』, 大修館書店, 2008年, 20-54.
- 8) 上掲書1)
- 9) 上掲書2)
- 10) 上掲書2)